
夜々木紘と夏の日々

八雲 凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜々木紘と夏の日々

【Nコード】

N9575J

【作者名】

八雲 凪

【あらすじ】

それは、俺が高校1年生の頃の話。
暑い暑い夏の日。

俺はちょっと変わった変人に出会った。

その出会いは、俺がこれまで積み重ねてきた16年間という常識を全てぶち壊した。

風景画

暑い……

外の気温は既に35度を超えているだろう。

その暑い中、コンクリート地獄の中を目的地も決めずに歩いてい
るなんて……

自分でやっていることながらバカみたいだ。

なぜ、そんなことをやっているかって？

決まっている。

いい風景を探しているんだ。

こつ見えても俺は画家なんだ。

いや、正確には画家志望……

もっと正確に言えば、高校の美術部員って言うだけなんだけど。

まあ、そんなわけで今現在、風景画のデザインを探しに歩いてい
るわけなんだけど……

「いざ探してみるとなかなかないもんだなあ……」

どれくらい歩いただろう。

もう日が暮れかけて、太陽がオレンジ色になりかけた頃

「……ようやく見つけた」

そう見つけたんだ。

今まで見たこともないほど綺麗な風景を。

変人

「すげえ……」

思わず言葉を失った。

夕日と夜との境界

今まさに昼と夜が切り替わる瞬間がそこにあった。

今までこれほど綺麗な夕焼けは見たことがなかった。

いや……見たことはあったのかもしれない。

ただ意識して見たのはこれが初めてだった。

「おやおや、今日は先客がいるよ」

夕日を見るのに集中しすぎて、背後にいる人影に気がつかなかった。

その人物の特徴は、一言で言えば『細い』だった。

細長い手足に加え、痩せているものだから更にそれが強調されている。

そして最後に老眼鏡。

「見た目だけで言えば、まだ20代後半から30代前半といったところだろう。」

それなのに老眼鏡って……………

不自然にもほどがある。

そして、その変人^{かわらっせ}は俺に話しかけてきた。

「やあ、初めまして。君はこの夕日をスケッチしに来たのかい？」

俺の手に握り締められているスケッチブックを見て言ったのだらう。

「ええ、まあそんなところです」

「そうか……………君もか」

「え？」

思わず疑問形で聞き返してしまった。

「いや、私も昔はこの風景を書いていたんだよ。なかなか絵になるだろ？」

「ええ、まあ」

それは俺の正直な感想だった。

ここからの風景は、俺が今まで見てきたものとは違うような気がしたから。

まるで幻想の世界にでもいるような気分だ。

凧

「ここを知ってから長いんですか？」

これはちよつとした疑問だった。

別に知らなくても全然困ることもないだろうけど、この人に対する興味というものだった。

「どうだろうね。この場所を知ったのが大昔のようにも感じられるし、ついさっき知ったようにも感じられる……」

何を言っているんだこの人は？

どうやら俺がこの人を見て、一番に感じた『かわりもの変人』という感情は当たっているようだ。

だが、俺がそのことについて質問するよりも早くに彼は続けて言った。

「わかってる。矛盾むじゅんしてるって言いたいんだろ。でもね……ここはそういう場所なんだ」

彼の答えは俺が想像していたものとは違っていた。

「もしかしたら、君がここを見つけられたのもただの偶然じゃないかもしれないね。あ、そうそう、君って言う言い方は変だな……名前なんて言うの？」

普通、こういう人に自分の名前なんて言わないほうが良いの
だろう。

でも彼が俺に危害を加えるという気は不思議としなかった。

「紘じゆうです。夜々木よよぎ紘じゆう」

「へえ、ヒロ君か。いい名前だね」

「えっと……」

「ああ、僕かい？ 僕の話は……そうだな。みんなからはなま風かぜって呼ばれてるけど？」

「風さん？ でいいですか？」

「ああ、構わないよ。それより、そろそろ帰ったほうが良さそうだ。」

「え？」

「もうじき日も暮れるし、ここは夜になると危ないからね」

風さんは笑いながらそう言うと、僕の後ろを指して言った。

「今日はもうお帰り。また暇なときにも遊びにおいでよ」

不思議と、その時の俺は彼の言うことを聞いていた。

ちやんと考えていたのだろうか？

わからないが、そのときの彼の言葉には妙な説得力があった。

そして、俺は凧さんの指したほうを向いて歩き始めた。

帰り道

どれくらい歩いただろう？

わからないくらい歩いて、でも足はほとんど疲れてなくて……

例えるなら……そう、まるで夢の中を彷徨さまよっている感じだった。

気がつくと、いつの間にか自分の家の前に着いて……

本当に不思議な感じだった。

そして、家に帰り着いてから気がついた。

「あ、一番肝心なスケッチしてないじゃん……」

そこにあっただのは、家から出発したのと同じ状態の白紙のスケッチブック。

そう、今日一番の目的だった風景画のスケッチというものをせざるに帰ってきたのだ。

「まったく、何やってんだよ俺！」

自分で自分を罵ののりつつ、今日あったことを思い返してみた。

夏のコンクリートジャングルの中を歩いていたら……あれ？

おかしい、あきらかにおかしいぞ。

この町にあんなに綺麗に夕日が見える場所があったか？

あとから思い返してみれば不思議な現象のオンパレードだった。

それに、あの場所ではビルはおろか住宅一つ……いや、人間だつてなま尻さん以外いなかったじゃないか。

そんなことは絶対にあるはずがないんだ！！

じゃあ一体……俺は今日どこにいったんだ？

結局、いくら考えても答えが出ることはなかった。

色のない世界

「……眠い」

結局、昨日の晩は眠れなかった。

考えすぎた結果が睡眠不足という点に結びついたというだけなのだが……

まあ、今現在は高校の夏季休業中……正確に言うと夏休みだから昼まで寝ててもよかったのだけど、今日はなんとなく眠れそうにな気がしたので、そのまま起きることにした。

適当に私服を選んで着替えてから、リビングに行くといつも通りの光景がそこにあった。

無人のリビング。

両親は二人とも共働きともはたらなので、この時間帯は誰もいない。

そしていつものようにレンジの中には朝食が入っていた。

俺はテレビに電源をつけ、ゆっくりそれを食べ始めた。

朝食はいつもと変わらない味だった。

いつからだろう……食事に味がなくなったのは。

いや、この世界の見え方すらいつの間にか変わっていた。

小さい頃見たきらきら輝いていた世界は、いつからだろう……色が消えていた。

そして、年を重ねると共にその『色のない世界』が自然になっ
しまっていた。

当たり前になった世界。

でも昨日見た風景は違っていた。

小さい頃見たときと同じように……いや、もっと輝いていたかも
しれない。

俺はそれをもう一度見てみたかった。

たとえ矛盾ばかりの世界で不可思議ふかしぎめいていたとしても。

だから手に取った。

白紙のままのスケッチブックを。

曇天

玄関で靴を履いて外へ出ると昨日に比べて過ごしやすい天候になっていた。

今日の空は昨日の快晴とは違い、厚い雲が張り詰めていて今にも雨が降り出しそうだった。

「雨……降りそうだな」

とりあえず玄関に置いてある雨傘を手に取り出発した。

道順は昨日と同じところを歩くことにした。

国道からわき道に逸れて、路地裏へと入っていく。

そして、それからは記憶力の問題だった。

途中で何回も道を間違え、後戻りしたがなんとか昨日と同じ道を辿れた……と思う。

そして、昨日と同じように日が暮れかけた頃、ようやくあの場所に辿りつくことが出来た。

「着いたのか？」

多分、着いたのだと思う。

昨日と同じように、その場所に建物や人の姿はなかった。

ただ昨日と違っていたのは、その場所に昨日のような綺麗な夕焼きれいなけではなく、俺の住んでいる世界と同じような曇天どんてんだった。

11の場所

「さてと……これからどうするかな?」

とりあえず来たのはいいものの、これからどうしていいかわからなかった。

絵を描く……といっても、俺の描きたいのは夕焼けだ。

こんな曇^{くも}り空じゃない。

何をしていたか考えていると、昨日と同じように後ろから声がした。

「やあ、また来たのかい?」

振り返ると、そこには昨日と同じように凧^かさんが立っていた。

「ええ、暇人ですから」

そう言うと、彼は笑いながら手招^{てまね}きをしてから歩き出した。

「えっと……どこにいくんですか?」

「どこだと思っ?」

凧さんは振り返りもせず聞き返してきた。

「さあ、どこでしょう。想像もできませんね」

あきれた声で答えると、凧さんは少し笑ってまた話しかけてきた。

「その様子だと、ここが君の住んでいる場所とは違うことは気づいてるよね？」

「ええ、だいたいは」

「それでも来たということとは……」

「ここが何なのか知りたいんです」

そう答えると、凧さんはそれ以上何も答えなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9575j/>

夜々木紘と夏の日々

2010年12月22日10時43分発行